

幕末維新时期（主に 1866 年～1870 年） サンフランシスコ在住日本人関連史料調査報告 ——『高橋是清自伝』に登場する「金子」に焦点を当てて

塩 崎 智

A Report on a Survey of Historical Documents Related to
Japanese Residents in San Francisco during the Bakumatsu
and the Meiji Restoration Period (Mainly 1866-1870)
—— Focusing on “Kaneko” in *The Autobiography of Takahashi Korekiyo*

Satoshi SHIOZAKI

要 旨

本稿は、筆者が 2023 年 8 月に米国サンフランシスコで実施した、幕末維新时期に現地に住んでいた日本人に関する史料収集の成果の一部の報告とその分析の試みである。今回はサンフランシスコに 1867 年 9 月から 1868 年 12 月まで滞在していた高橋是清の自伝に登場する日本人関連史料を中心に収集した。その中で、日本人から頼りにされた可能性が高い「金子」という日本人に焦点を当てた。事前の調査では金子は薩摩藩出身と思われたが、今回の調査により、金子は若林とともに幕府が派遣した海軍士官候補生で、まず英語の勉強のためにシティカレッジ（City College）で学んでいた可能性が高い。シティカレッジでは、1867 年から 1870 年までの間に約 20 人の日本人が学んでいた。彼らの大半の名前は史料に書かれていないが、金子と若林の他に薩摩藩、福井藩、彦根藩士等がいたと考えられる。サンフランシスコは米国東部の都市と異なり、太平洋を挟んだ隣国日本との貿易機会の拡大を歓迎する雰囲気があった。横浜からやって来た日本人は、すでにサンフランシスコに住んでいた多くの中国人移民と比較され、その勤勉さや向上心、旺盛な好奇心が地元市民に好印象を与えていた。ほぼ同時期の米国東部の日本人留学生が集まっていた都市との比較を意識しながら史料の分析を進めたい。

キーワード：日本人米国留学生、日本人米国移民、幕府海軍、サンフランシスコ、シティカレッジ、幕末維新时期、高橋是清

はじめに

筆者は、ここ数年小浜藩英学教師、塚越酸素彦（鈴彦，1842-1886）に関連する史料の収集，調査を進めてきた。塚越の伝記『金蘭簿物語』の内容を，日米の関連史料を使用し史実を確認する作業である。これまでに塚越の上州太田での出生から，江戸，横浜，小浜時代までを検証し，1870 年 6 月のサンフランシスコ（以後 SF）上陸までたどり着いた⁽¹⁾。

塚越の伝記の SF 時代の内容と史料との照合を行う前に，塚越渡米前後（1866 年頃から 1872 年頃まで）の SF 在住日本人に関する史料を収集し，当該期間の時代的，社会的背景を理解しておきたい。

塚越の伝記には SF 在住日本人，日本人コミュニティの様子についての記述はほとんど無い。塚越は日本で幕臣を中心に人脈を上手く使いながら行動範囲を広げてきた。SF でも日本人，米国人を問わず活発に交流し活路を開いていたことは想像に難くない。塚越の伝記には，塚越は渡米前から米国に豊富な人脈があった旨が記されている⁽²⁾。この在米日本人あるいは米国人はどのような人々だったのだろうか。

本稿は，塚越研究の背景理解というミクロなテーマから出発しながらも，幕末維新时期に SF 上陸後，米国東部に移動せず SF あるいはその周辺に留まっていた日本人に関する，マクロな総合的研究の第一歩としての役割も担っている。

なお，年号日付等の表記は原則として西暦を使用している。漢字表記は旧暦である。

1. 幕末維新时期米国渡航者に関する先行研究

幕末維新时期の日本人米国渡航者研究は，移民史と日本史の両方からのアプローチがある。日本人米国移民史に関しては，すでに広範な研究の蓄積がある。SF を含む米国カリフォルニア州移民については，『米国日系人百年史：在米日系人発展人士録』（新日米新聞社，1961 年）や今野敏彦，藤崎康夫 編著『移民史 3（アメリカ・カナダ編）』（新泉社，1986 年），糸井輝子『外国人をめぐる社会史 近代アメリカと日本移民』（雄山閣，1995 年）等に興味深い事例が紹介されている⁽³⁾。またカリフォルニア州のワカマツ・コロニー（Wakamatsu Colony）に関しても，これまでに包括的かつ詳細な研究がまとめられている⁽⁴⁾。

日本史側，とくに幕末維新史からのアプローチとしては，戊辰戦争前後に，政治的理由で国外逃亡先として米国に渡航し，SF に長期間居住していた旧幕臣や佐幕藩士の個別事例が紹介されている⁽⁵⁾。この分野を包括的に扱った研究は未見である⁽⁶⁾。

また、学術研究者以外の関心を引きやすいテーマであるせいか、インターネット上で参考になる史料が散見される。その際は、ホームページ管理者と連絡を取り、その情報も積極的に活用した。

幕末維新という、日本の混乱期に渡米した日本人は多様なバックグラウンドを持ち、出国渡米理由も様々だった。米国東部のボストン (Boston) やニュージャージー州ニューブランズウィック (New Brunswick)、ニューヨーク (以後 NY) 州ブルックリン (Brooklyn) といった日本人留学生の拠点と異なり、政治的理由により日本を脱出した者、就業を目的とした者、農業従事者等、多様な日本人が住み着いていたことが SF の大きな特色である。歴史の転換期のダイナミズムが直感できる大変興味深い研究テーマと言える。

米国東部に進まず、幕末維新期に SF に留まった日本人に関しては、学術レベルの総合的な史料調査、研究はこれまで行われていない。SF に上陸し東部に向かった留学生や視察団、使節団の記録に、「SF を案内する在住日本人」として登場する程度の存在だった。

本稿は、2023 年 8 月に筆者が SF で収集した史料を中心に、現状で利用可能な日米の史料を動員し、塚越酸素彦も含めた幕末維新期に SF で一定期間生活していた日本人の渡米理由、SF 滞在中及び帰国後の活動、日米交流史上の位置づけ等についてまとめる研究の第一弾となる。

2. 高橋是清の自伝から抽出した調査項目

今回の渡米では SF に約 1 週間滞在し、サンフランシスコ公共図書館 (SF Public Library) 6 階にある SF 歴史センター (SF History Center) の司書の方々の協力のもとに、当館が所蔵する史料や、カリフォルニア州の新聞のキーワード検索ができるデータベース California Digital Newspaper Collection を活用し調査を実施した。日本に帰国後は、インターネット上でその存在を知った八木谷涼子氏から、いくつもの貴重な史料、情報を提供していただき、情報交換をすることができた。

日本側では、幕末維新期に SF に長期間 (1 年以上) 滞在していた日本人の日誌のような一次史料は発見されていない。よく引用されるのは高橋是清 (1854-1936) の自伝である⁽⁷⁾。

高橋の SF 在住期間は、1867 年 9 月から 1868 年の 12 月頃までの約 1 年 3 か月間である。自伝のこの期間の記述には、日記や書簡などの一次史料の引用がほとんど無いため、記述内容の事実確認が必要である。しかし、その検証をするための史料も不十分な状態で、今回の調査は高橋の自伝の史実確認も兼ねている。

高橋の自伝から、SF 在住日本人研究に関するキーワードを選び登場順に並べると以下ようになる。

1. 仙台藩出身で高橋より前に SF に来ていた**仙台藩士一条十次郎**と**越前藩士窪村純雄**⁽⁸⁾。
2. 高橋と同船して渡米した**薩摩藩士伊東祐亨**が持参した紹介状の宛名の**金子**という日本人。SF 市内のシティカレッジで学んでいた。**シティカレッジ**も重要調査項目である。
3. 金子の代わりに伊東を迎えに来た**薩摩藩出身の谷本（谷元）**。
4. 高橋が最初にホームステイした**ヴァンリード（Van Reed）**家。
5. カリフォルニア州オークランド（Oakland）在住の金満家カビテン・ロッジャー家で家事労働をしていた**関口保兵衛**。
6. SF で日本茶や日本の雑貨を売る米国人の店に勤めていた**佐藤百太郎**。
7. 商用で SF に来た**越前の医者某**とその通訳者、**宇和島藩士城山静一**。

本稿では、この中で 2. の「金子」に関する情報の紹介、分析を中心に報告したい。一条、窪村、谷元、関口、佐藤に関しては、すでに日本側の研究で少ないながらも関連史料が紹介されているが、金子は史料が全く見つかっていない。伊東が金子宛の紹介状を持参してきたことから、金子は当時の SF 在留日本人の交流において、ある程度重要な存在であったと推測される。

3. 渡米調査前の仮説 — 日本人留学生金子＝薩摩藩士説

今回の渡米前に、これまで収集してきた SF 在住日本人関連の史料を精査した結果、金子は脱藩薩摩藩士の可能性が高いと考えていた。高橋の自伝によると、高橋と同船して SF に上陸した薩摩藩士伊東祐亨（四郎，1843-1914）は金子宛の紹介状を持参していたが、金子は埠頭には現れなかった。紹介状の書き主は不明である。金子が在学中のシティカレッジに伊東は高橋を伴い行ってみたが、暑中休暇で金子は登校していなかった。諦めて埠頭に戻ると、谷本という薩摩藩出身者が伊東を、仙台藩士の一条が高橋を迎えに来ていた。谷本は薩摩藩士谷元道之（兵右衛門，村上，1845-1910）で、この経緯からすると金子も薩摩藩出身者である可能性が高いと考えた。伊東には固葉英次郎（木葉十蔵）という薩摩藩士が同行していた⁽⁹⁾。伊東の周辺は薩摩藩出身者で固められていた。ただし、薩摩藩士を薩摩藩士に紹介するのに、紹介状を書くだろうかという疑問は残る。

伊東は薩摩藩の開成所で英学、神戸海軍操練所で航海術、伊豆の江川太郎左衛門の葦山塾で砲術を学んでいたもので、SFで海軍、陸軍関係の施設を視察するのが目的だったのではないかと推測される。伊東の伝記には、1867年の渡米のことは書かれていないので、この渡米は脱藩的行動だった可能性もある。

伊東は薩摩藩士の枠を超えた行動をしていたので、金子は必ずしも薩摩藩士である必要は無い。

以上まとめると、金子は薩摩藩士の可能性が高いが、それ以外の可能性も排除できないということになる。

4. 薩摩藩士谷本の正体

金子が薩摩藩士かどうかの一つの鍵となるのは、伊東を迎えに来た「谷本」である。薩摩藩米国留学生関連の史料を調査した結果、高橋の自伝に登場する「谷本」は谷元では無い可能性が高くなった。以下、薩摩藩留学生研究の中心的存在だった犬塚孝明の論考を基に説明する。

犬塚によると、薩摩藩は2回に分けて英国、米国に留学生を派遣した。第一次は1865年に英国に派遣され、第二次は1866年に米国に派遣された。第二次のメンバーは30歳前後の尊攘派の中でも寺田屋事件に関わったような過激な藩士が多かった。谷元もその1人である⁽¹⁰⁾。米国留学生は、長崎にいた宣教師ギド・フルベッキ（Guido Herman Fridolin Verbeck, 1830-1898）を通して、米国のオランダ改革派教会のサポートを得て渡米した。

第二次米国留学生は、第一陣の本隊が長崎からヨーロッパ経由で1866年にNYに到着した。第二陣として木藤市助が横浜から、第三陣の谷元と野村も横浜から、両者とも太平洋を横断しSFに上陸した。

犬塚は、第三陣の谷元と野村の足跡を以下のように位置付けている。

横浜からコロラド号に乗り1867年6月14日にSFに着いた谷元と野村はパナマ経由で7月27日にマサチューセッツ州モンソン（Monson）に到着した。コロラド号と一緒に乗船していた横浜在住の宣教師サミュエル・ロビンズ・ブラウン（Samuel Robbins Brown, 1810-1880）は一足先に7月23日にモンソンに着いて第一陣の本隊に会った。第二陣の木藤は、この数日前にモンソンの森で自殺したのが発見され、着いたばかりのブラウンが葬儀の司式を担当した。第三陣の谷元と野村に関しては、留学、生活費用の工面がつかず、犬塚は、谷元と野村はモンソン滞在1週間ほどで8月5日にモンソンを出てNYあたりで無為の日々を送っていたのでは、と推測している。谷元と野村は、ニューヨークのマンハッタンにオフィスがあった、オランダ改革派教会のフェ

幕末維新时期（主に 1866 年～1870 年）サンフランシスコ在住日本人関連史料調査報告
リス（John Mason Ferris, 1825-1911）に留学費用の工面を頼みに行ったのだろうか。
谷元と野村はその後、トーマス・レイク・ハリス（Thomas Lake Harris, 1823-1906）が NY 州アメニア（Amenia）で主催していた「新生兄弟社」（The Brotherhood of the New Life）の共同体（コロニー）に参加することになり、アメニアに 9 月 26 日に着いている。この 8 月 5 日マサチューセッツ州モンソン発から 9 月 26 日 NY 州アメニア着の期間が史料的には空白ということになる⁽¹¹⁾。

この犬塚の説明には、高橋の自伝にある、谷元の 9 月 14 日の SF 滞在と横浜便乗船帰国は当てはまらない。

米国東岸と SF 間の移動は当時、パナマ経由の船・鉄道・船の経路が一般的で、片道約 1 か月かかった。8 月 5 日にマサチューセッツ州を出た谷元が 9 月 14 日に SF にいたのは可能だが、9 月 14 日かその数日後に SF を出て、そのほぼ 10 日後に NY 州に戻るのとは不可能である。

犬塚の研究によれば、谷元は 1867 年 9 月 26 日以後、ハリスのコロニーに約 1 年間留まり、1868 年 9 月 9 日に第一陣本隊の仁礼、江夏と船に乗りパナマ経由で SF に 10 月 3 日に着いた。

伊東を迎えにきたのが、薩摩藩士以外の在 SF 日本人ならば、金子薩摩藩士説の説得力が欠けることになる。

この点については、第一陣本隊の仁礼景範（1831-1900）の、1867 年 9 月 20 日の日記に、「竹内健蔵、肥後十郎カリホニヤから野村、谷元へ書状来れり。江戸から伊東四郎左衛門、木場十蔵渡海岸相成候と申来候事。」と書かれている⁽¹²⁾。

つまり、SF で伊東を迎えに来たのは、薩摩藩士の竹内と肥後で、彼らから伊東、固葉の SF 到着を知らせる手紙が米国東部にいた谷元、野村に届き、さらに仁礼に知らされた、と考えられる。

5. 薩摩藩士肥後十郎と竹内健蔵

肥後と竹内は、犬塚も含めて、これまでに研究対象として扱われたことは無い。2 人に関する史料は 3 点ある。

1 点目は横浜で発行されていた *The Daily Japan Herald* 1867 年 5 月 27 日号の記事である。1867 年 5 月 25 日横浜出航のコロラド号の乗船者リストが掲載されている。

Rev. S. R. Brown, wife & daughter

Sasaki Gonruk, Yangimoto, Nomura, Higo, Mura Kami, Drozo, Kinzo, Ghozje

Daily Alta 1867 年 6 月 14 日に掲載された同じコロラド号の下船者リストには、これ以外に、Gaugimatu, Saki が加わり、Five in the steerage and 6 Japanese との記載がある。一行はブラウン夫妻と娘、越前藩士佐々木権六（1830-1916）、通訳柳本直太郎（1848-1913）、薩摩藩士谷元（変名村上）、野村、肥後、竹内（Kinzo）、Drozo, Ghोजje, Gaugimatu, Saki の計 13 人となる。この中にはブラウンが連れてきた日本人の小仕も含まれているかもしれない。肥後と竹内は谷元と野村とともに SF に上陸したが、谷元と野村は SF から船に乗りパナマ経由でモンソンに向かい、仁礼の日記に書かれていたように、肥後と竹内は SF に残っていたのではないだろうか。

2 点目は、薩摩藩英国留学生で英国から米国に渡った松村淳蔵（1842-1919）の懐旧談「慶応年間薩摩人士洋航談」の記述である。谷元は脱走して米国に渡航した浪人で、仁礼が帰国する際に日本に連れ戻ることになったという。谷元は竹内作蔵、伊藤祐亨、野村市介と行動を共にしていたが、谷元以外の 3 人は「中途資金調達の為とて前に帰れり」と記録されている。竹内作蔵は竹内健蔵と同一人物だろう。伊東と谷元、野村、竹内が一緒にいた点は、伊東を谷元が迎えに来たという高橋の自伝の記述を裏付けるが、野村は谷元帰国後もハリスのコロニーにいたことは確実である。伊東に同行した固葉や、竹内と行動を共にしていた肥後も抜けている。

3 点目の史料は、*NYTimes* 1867 年 12 月 7 日に掲載された記事である⁽¹³⁾。薩摩藩の長崎の代理人 KANIMI-NAME が米国人向けに発した警告で、6 人の脱藩密航者が米国におり、藩主としては彼らの借金等は責任を持たない、という内容である。ほぼ同じ内容の記事は、米国の他のいくつかの新聞でも確認できる。*Commercial Advertiser* (NY 市) 1867 年 12 月 9 日の記事には、Look out for them（この連中に要注意）という見出しが付けられている。お尋ね者扱いである。

6 人の名前は、Tarri Motto Nero, Nomura Ichutzke, Taki Uchi Kenso, Mori Kakutzo, Mone Kango, Huro Yuso. と書かれている。谷元、野村以外に 4 人の名前が書かれている。Huro Yuso は肥後十郎、Taki Uchi Kenso は竹内健蔵と同一人物ではないだろうか。Mori と Mone は不明である。

犬塚の研究によれば、1867 年 12 月頃は谷元と野村はハリスのコロニーにいたはずである。この記事の背景は不明だが、谷元、野村、肥後、竹内以外に 2 人の脱藩薩摩藩士が米国にいて、金策に困り米国人に何らかの迷惑をかけていたという事態が発生していたのだろうか。犬塚の研究によると谷元と野村は正式な薩摩藩派遣の留学生ということになっているが、この記事に書かれているように、谷元、野村、肥後、竹内の 4 人は脱藩渡米者である可能性が高い。だからこそ、第一陣本隊の仁礼等は、谷元、野村の留学費用の現地での捻出に困ったのではないだろうか。

いずれにしても、伊東を迎えに来たのが、谷本＝谷元ではなく、肥後と竹内だとして

幕末維新时期（主に 1866 年～1870 年）サンフランシスコ在住日本人関連史料調査報告
も、薩摩藩士ということに変わりはなく、金子薩摩藩士説は健在ということになる。

6. 幕府海軍が派遣した金子と若林 ― 今回の SF 現地調査結果

以上のような経緯で、条件付き金子＝薩摩藩士説にたどり着いた。ここからは、今回の SF での調査の結果について述べる。結論としては、金子は薩摩藩士ではなく幕臣の海軍士官候補生で、若林という幕臣とともに、シティカレッジで学んでいたと考える。日本側の幕府海軍関連史料や幕臣事典、現在のパスポートに当たる印章のリストで、金子と若林の名前、幕府海軍から米国への留学生派遣の記録は見当たらないので、金子が幕府海軍派遣の留学生と確定できていないのが現状である。

金子、若林の SF 到着は、1867 年 5 月 7 日の可能性が高い。幕臣小野友五郎一行 SF 到着の約 2 か月後である。小野一行の軍艦購入のための派遣と海軍士官候補生金子、若林の米国派遣は、幕府海軍の一連の動きと考えてよいのではないだろうか。谷本、野村、肥後、竹内の到着の約 1 か月前で、高橋、伊東の SF 上陸の約 4 か月前になる。金子の名前は「かんべえ」のようだが確定できず、SF 出航の帰国時期も推定で 1868 年 6 月である。

以下に史料となる、今回発見した新聞記事を必要に応じて引用し、分析の経緯、結果を説明する。本稿では、基調史料となる英文記事から、複数のキーワードを抽出し、それをもとに主に金子に関する可能性の高い関連史料を探すという方法を取った。

(1) 金子、英文記事に登場 *Daily Alta* (SF 市) 1867 年 11 月 13 日

今回のリサーチで明確に金子という名前が出てきたのは、この新聞記事 1 本である。SF 商工会議所 (The Chamber of Commerce) が主催した祝宴の記事である。前日 11 月 12 日の夜、SF 商工会議所のオフィス移転を祝う大宴会が催された。これには SF の紳士貴顕が招待され、各国の在 SF 領事も招待されていた。ここに日本代表として招待されていたのが、日本政府から派遣され市内のシティカレッジで学んでいた、海軍士官候補生の金子と若林である⁽¹⁴⁾。新聞では以下のように書かれている。金子と若林に関する部分を抜粋する。

The Asiatic Empires were represented by Wah Kaba Yashe and Kane Ko, two midshipmen of the Japanese navy, who are now studying in the City College at the expense of the Japanese Government, 一中略― The Japanese were dressed in the European fashion, the Celestials in their national costume.

日本政府が派遣した海軍軍人は金子と若林という名前であり2人ともシティカレッジで学んでいる。

これにより、高橋と伊東がSFに到着した1867年9月14日の約2か月後、金子と若林という幕府海軍が派遣した士官候補生がSFにいたことが分かった。2人とも洋装で参加している。商工会議所の祝宴に日本代表として招待されたので、SFのビジネス界、上流階級では、ある程度認知された存在だったのだろうか。いつSFに来て、どれくらい滞在するのかは書かれていない。金子と若林のファーストネームも書かれていない。

Japanese navy, Japanese Government は、通常幕府海軍、江戸幕府を指すと思われるが、薩摩藩海軍、薩摩藩の可能性も僅かながら残っている。ちょうどこの時期、1867年4月1日から11月3日までパリで万国博覧会が開催されていた。ここでは、幕府は「日本大君政府」、薩摩藩は「薩摩太守政府」と名乗り、展示は別々に行っていた。このような薩摩藩の姿勢を考えると、薩摩藩士の金子と若林が自らの正統性を主張するために「日本海軍」「日本の政府派遣」と米国人記者が誤解しそうな表現を使ったことも否定できないのではないだろうか。金子と若林は変名という可能性もある。

この記事に基づき史料とし、金子に関する史料調査のキーワードとして「日本の政府」、「海軍」、「シティカレッジ」、「2人の日本人」を抽出した。このキーワードがヒットした英文記事の中から、重要と思われるものを以下に採り上げる。

(2) 金子のファーストネームは「かんべい」？ *SF Daily Examiner, SF Daily Evening Bulletin* 1868年4月15日

雑報レベルの記事だが、「シティカレッジ」と「日本人」がヒットした。金子のファーストネームとSF滞在期間を示唆する記事が2本ある。

1868年4月でSF到着の約1年後ということになる。

SF Daily Examiner 1868年4月15日のODDS AND ENDS（雑報）欄に次のように書かれている。

Kam-Ako Kam-Cay, the Japanese Prince, is still attending school at the City College. He is said to be a good scholar.

さらに同日の*SF Daily Evening Bulletin*にも、A Japanese Prince is attending the City College. His name is Kam-Ako-Kambay. という記事が掲載されている。

この綴り通りに日本語に直すと、「かまこ・かんけい」（前者）、「かまこ・かんべい」（後者）と読める。金子が「かまこ」と聞こえるのは許容範囲ではないだろうか。前者では、「シティカレッジでまだ学んでいる」ということは、前出(1)の記事の掲載時期の

1867 年 11 月から 5 か月継続してシティカレッジで学んでいたことを示唆しているのだろうか。

問題は「かまこ」の身分である。どちらも Japanese Prince と書かれている。米国の新聞では、日本人留学生をよく Prince と表現するが、それは大名子弟か、各藩の家老クラスあるいはその子弟である場合が多い。幕府派遣の海軍の軍人あるいは士官候補生は、通常は Prince と書かれることはない⁽¹⁵⁾。

(3) 金子の SF 到着は 1867 年 5 月 7 日？ *SF Evening Bulletin* 1867 年 5 月 8 日

金子と若林の名前は記されていないが、2 人の SF 到着の時期を示す有力な記事がある。この記事で、2 人の日本人の海軍人が横浜から来てシティカレッジで英語と航海学の理論を学ぶ旨が書かれている。彼らは日本政府からの派遣で、SF で学んだ後、東部に移動し、そこで航海学を実習する予定だ。2 人の名前は明記されていないが、「シティカレッジ」、「海軍＝航海学」、「2 人の日本人」、「日本の政府」というキーワードがヒットするので、金子と若林と考えていいだろう。

原文は以下の通りである。

Arrival of Japanese Seamen

Among the passengers by the ship A. M. Lawrence, from Yokohama, are two Japanese seamen who propose to enter the City College of San Francisco to learn the English language and theoretical navigation. They will afterwards go to the Atlantic States to learn practical seamanship, after the American model. They are sent out by the Japanese Government.

2 人は太平洋郵船ではなく、A. M. ローレンス (A. M. Lawrence) という船で横浜から来ているという点が明らかになった⁽¹⁶⁾。正確な SF 上陸の日付は 5 月 7 日である。高橋と伊東が SF に上陸する約 4 か月前である。SF で英語と海軍学の理論を学んだ後、米国東部に移動し、おそらく U.S. Naval Academy (米国海軍士官学校、メリーランド州アナポリスにある) で海軍学の実践を学ぶ計画だったのである。U.S. Naval Academy の日本人学生リストに 2 人の名前は入っていないので、それは実現しなかった。

神谷大介『幕末の海軍』によると、幕長戦争での敗戦後、1866 年 9 月頃から 1867 年 3 月 12 日にかけて海軍職のトップは、海軍奉行、軍艦奉行、軍艦頭、軍艦役に再編成され新たなスタートを切った (p. 219)。この変化の一環で、金子と若林の米国派遣が行われたのだろうか⁽¹⁷⁾。軍艦購入目的で幕府から米国に 2 月に派遣された小野使節団

との関係も考える必要がある。

幕府海軍は、1867年に英国からリチャード・エドワード・トレーシー（Richard Edward Tracey, 1837-1937）ら11人（トレーシー顧問団）を海軍教育目的で招聘している。金子、若林の米国派遣との関係も調査する必要がある。

5月7日にSFに上陸した金子と若林のちょうど1週間後の活動を示す記事がある *SF Daily Evening Bulletin* 1867年5月13日である。

SF市内の第一長老派教会（The First Presbyterian Church）で、同教会の日曜学校（Sunday School）の18年目の記念日を祝う祝典が開催された。そこに、最近SFに着いた2人の日本人が出席している。彼らは日本では学べないことを学べるので米国に来たという。

原文は以下の通りである。

Among other illustrations, called attention to the presence of two Japanese students, who had recently arrived here, to secure educational privileges not readily obtainable in their own country.

キーワードのヒットは「2人の日本人」のみだが、日本では学べないことというのは「海軍学」ではないだろうか。SFに着いたばかりの2人の日本人が教会の日曜学校の祝典に参加しているのには理由がある。この教会はシティカレッジと深い繋がりがあり、建物も共有していた⁽¹⁸⁾。この祝典の司式として参加しているのは、日本人との繋がりが深く、後に日本にお雇い外国人教師として派遣される、シティカレッジの校長ピーター・ヴルマン・ヴィダー（Peter Vrooman Veeder, 1835-1936）である。「シティカレッジ」のキーワードもヒットしたと考えてよいだろう。

(4) 1867年から1870年までSFで学んだ20人の日本人 *Daily Alta* 1870年12月15日

幕末維新期のSF在住日本人に関する情報の収集と分析は、本稿のマクロの目的である。今回の調査で、このテーマに関する基本史料となる記事を発見した。

Daily Alta 1870年12月15日に掲載された、Reconstructed Japanese — Progress of Japanese Students in America という大見出しの記事である。

日本人がSFに住み始めた1867年頃から1870年までの3年間のSF在住日本人の歴史について回顧している。

ほぼ同じ内容の記事が、*Chicago Tribune* 1870年12月19日にも同じ大見出しで掲載されている。小見出しは、Progress of Some of the Japanese Students in San

Francisco — Their Present Inclination to Come to the East, と、日本人留学生の米国東部志向への変化が強調されている。*World* (NY 市) 1871 年 1 月 3 日の紙面にも、TEACHING THE JAPS — Progress of Japanese students in America という大見出しで掲載され、出典は *SF Bulletin* となっている。この記事は全米の主要新聞に転載されている可能性があり、SF のみならず全米レベルで話題性のある記事だったことが分かる。

SF の日本人留学生は、時系列的に 3 つの日本人集団（2 つのグループと 1 個人）に分けて書かれている。日本人の名前は一切書かれていない。匿名の理由は不明だが、密航渡米のため名前を明かしたくない日本人もいたのだろう。記事は無署名で、SF 在住日本人の事情にかなり詳しい米国人によって書かれている。

大見出しにあるように、米国日本人留学生の進歩が、彼らの帰国後、日本を生まれ変わらせるという内容である。

後半の部分に、この記事が書かれた 1870 年 12 月の時点での 2 人の日本人を含めて、過去 3 年間に全部で 20 人の日本人がシティカレッジで学んだ、と書かれている。同時期、多くの日本人が学んでいたニュージャージー州ニューブランズウィックにあったラトガース大学 (Rutgers College) とその付属校 (Rutgers College Grammar School) に次ぐほどの多さである。幕末維新期の日本人留学生のメッカの一つとして、SF は研究対象としての資格を十分に備えている。

本稿と最も関わりが深いのは、1867 年渡航の最初のグループである。1867 年 5 月に SF に来て 11 月に SF にいた金子と若林はこの区分に当たる。関連部分の英語原文と抄訳（拙訳）は以下の通りである。

Three years ago, two Japanese officials, pursuant to instructions from their own government, came to California, to study the language and customs of the American people. They learned English rapidly, and displayed great eagerness and aptitude for the acquisition of a thorough knowledge of mathematics. In fact, a thirst for mathematics is one of the characteristics of the race. The two representatives of Japan to whom we refer, made excellent progress in their studies, and returned home with a high opinion of America and her people.

[抄訳（拙訳）]

3 年前、2 人の日本人の役人が日本の政府の指示を受けてカリフォルニアに、英語と米国人の諸々の慣習を学びにやってきた。2 人とも英語の学びは速く、数学へ

の並々ならぬ興味を示し、数学の完全な知識を習得するという素晴らしい才能を見せた。数学の学習欲は日本人の特色の1つである。この2人はこれらの学びに関して立派な進歩を見せ、米国と米国人に対して深い敬愛を抱いて帰国した。

日本政府派遣で2人の日本人が1867年（時期不明）にSFにやってきた。目的は英語とアメリカ人に関する一般事項を学ぶためである。英語の学習は早く、数学を学ぶのに熱心で完全に数学をマスターした。この記事が書かれた1870年12月の時点ですでに帰国している。

「日本の政府」、「海軍」、「シティカレッジ」、「2人の日本人」のキーワードの中でこの記事がヒットするのは「日本の政府」、「シティカレッジ」、「2人の日本人」である。「海軍」に関しては、金子と若林は海軍施設あるいは専門の学校で学んでいたわけではないので、記事に「海軍」関連の言葉が出て来ない。海軍学では数学が重要なので、金子と若林は海軍の学習のために数学に力を入れていたと考えられる。

数学といえば、1867年3月20日SF着のコロラド号に乗っていた、幕臣の小野友五郎（1817-1898）は数学者として知られていた。当時の日本人留学生の数学学習欲に関しては他に例を知らない。小野一行の目的地は首都ワシントン並びに米国東部であり、SFにいた期間は到着後と帰国前と限られた日数しかない⁽¹⁹⁾。使節団の代表である小野がこの2人のうちの1人で、市内の学校で長期間学んでいた可能性は無い。

この記事で紹介された、第二、第三の日本人グループあるいは個人に関しては、別稿で扱いたい。

(5) シティカレッジで学ぶ4人の日本人——航海術、海軍学希望——金子、若林、肥後、竹内？ *Chicago Tribune* 1867年7月26日

金子と若林は1867年5月7日にSFに上陸し、シティカレッジで学び始めた。その約2か月後に、同校で4人の日本人が学んでいたと書いている記事がある。*Chicago Tribune* 1867年7月26日に掲載された記事だが、同紙のSF特派員Altamonte筆、6月28日となっている。

大見出しは、SAN FRANCISCOで、その中のThe Japanese and Chineseという記事に注目したい。この記事の骨子は、異文化吸収に貪欲な日本人と保守的な中国人の対比にあるのだが、その話の発展で1867年6月末の時点でSFにいる日本人の様子が記述されている。

まず、1867年6月末の時点で、日本からSFに来る船には、人数の差はあれ、裕福な日本人が、米国の習慣、法、制度、文明など学ぶ価値がある物を何でも学びに来る、と書かれている。この記事によればシティカレッジには4人の日本人が学んでいる。名

前は書かれていないが、金子、若林に 6 月 14 日に SF に上陸した薩摩藩士の肥後と竹内が加わったのではないだろうか。

6 月に SF に到着したコロラド号には、航海技術や海軍学を学ぶことを求めている多くの日本人が乗ってきたと書いてある。この船に乗ってきたのは、福井藩士佐々木権六と通訳の柳本直太郎、薩摩藩士谷元道之と野村一介、肥後十郎、竹内健蔵等であるが、彼らは海軍学を希望と記者に語っていたのだろうか。ヒットしたキーワードは「シティカレッジ」「2 人（ここでは+2 人）の日本人」、「海軍」となる。

(6) 金子・若林の帰国は 1868 年 6 月か？ *Sacramento Daily Union* 1868 年 5 月 27 日

金子と若林と一緒に帰国したのか、どちらかが先に帰国したかは不明だが、1868 年 6 月頃に一緒に帰国したことを示唆する記事がある。*Sacramento Daily Union* 1868 年 5 月 27 日の記事である。シティカレッジで学んでいた日本人学生（複数、人数不明）が、帰国する前に、米国人の農園を野菜の栽培の見学に訪れ熱心に質問していた旨の内容が書かれている。彼らは頭脳明晰で英語も流暢である。以下原文である。

Japanese Students,

It may be an item of interest to know that the Japanese students attending the City College here visited my garden on Saturday, for the purpose of studying my methods of cultivating vegetables for seed, in order to practically understand the subject before leaving for their native land. These students are remarkably intelligent, speak our language fluently and seem never to tire of asking questions. DANIEL S. PERKINS

この記事には日本人留学生の人数が書かれていない。1868 年 5 月 27 日は水曜日なので、日本人が訪れた土曜日は 5 月 23 日だろうか。キーワードを抽出すると、「シティカレッジ」、「野菜栽培法」、「帰国前」である。「野菜栽培法」というキーワードは初出である。

正確な日程は定かではないが、幕臣の松本寿大夫（生没年不明）と塚原昌義（1825－1888）は身分の高い幕臣だったため、身の危険を感じ 1868 年 5 月 19 日に SF に上陸していた⁽²⁰⁾。松本は幕府が 1867 年 3 月に米国に派遣した小野友五郎一行の 1 人である。

彼らは渡米後、カリフォルニア州アラメダ（Alameda）で農園開拓に関わった可能性が高い⁽²¹⁾。想像をたくましくすると、幕臣同士の金子か若林が SF 上陸直後の塚原に頼まれて、米国の農業の知識を現地の米国人から熱心に聞き取っていたことも考えられ

る。農業に関しては、小野友五郎一行の津田仙（1837-1938）も興味を示していた。ほぼ1年前の7月に米国東部からSFに戻ってきた小野友五郎一行の津田仙（1837-1938）も、SFで葡萄、麦、野菜の種の購入を約束して日本に戻った。

以上、今回の渡米史料調査と、帰国後の史料の分析結果を、金子関連の可能性が高い記事に限り紹介した。入手した史料のほぼすべてが現地の新聞記事であるので、その他の関連情報との照合が必要となる。今回SFで調査した手応えとしては、日本人と関わりがあったことが明らかなSF在住米国人に関する史料の発掘等が今後の米国での調査項目として挙げられるだろうか。日本側でも、海軍関係では勝海舟関連史料、SFと日本との貿易に関しては、横浜在住の貿易関連業者関連史料等を調査する必要がある。最後に今回の調査結果のまとめと今後の課題項目を列記して本稿の結びとしたい。

おわりに

本稿は、筆者が2023年8月にSFで実施した史料調査結果の一部の発表と分析結果である。幕末維新期の在SF日本人関連史料として重要な高橋是清の自伝から、関連する日本人等をキーワードとして選んだ。その中から今回は金子を採り上げ、金子＝薩摩藩士という仮説を立てて現地調査を始めた。

個人の関連史料報告と分析というミクロな作業を進めながら、幕末維新期の在SF日本人コミュニティ全体の調査、幕末維新期のSFを舞台にした日米交流というマクロな視点を意識して筆を進めた。その結果分かったことと、これからの課題等を以下にまとめる。

(1) 幕府海軍が米国に派遣した金子と若林

金子については正確な名前（新聞史料によると「かんべい」）、SF在住期間など依然不明な点が多いが、若林とともに幕府海軍から派遣された幕臣である可能性が高い。SFには横浜からA. M. ローレンス号に乗って1867年5月7日に到着したと思われる。2人は市内の中心地にあった、長老派教会と関係が深いシティカレッジで英語を学んだ。当時の校長は1871年に日本に教師として招かれたヴィダーだった。金子と若林は、最終的には東部に移り米国海軍士官学校（U.S. Naval Academy）で実践的な海軍学を学ぶことを考えていたようだ。

1867年は、幕府にとっても幕府海軍にとっても激動の時期である。その時期に金子と若林が米国に派遣されたとなると、それはなぜか。同じ1867年の約2ヶ月前に派遣された小野友五郎使節団とどのような関係があるのか、といった疑問点を明らかにする必要がある。

1867 年 11 月に SF の商工会議所の祝典に金子と若林は日本代表として招待された。幕臣ということで日本政府関係者として選ばれたのだろう。これをきっかけに SF 市民にも知られる日本人になったのではないだろうか。金子と若林の SF 在住日本人コミュニティの中での位置づけ、交際関係等は今後の課題である。

帰国時期は 1868 年 6 月の可能性が高い。幕臣として外国で幕府の苦境を座視しているわけにはいかない状況だっただろう。この帰国時期が正しければ SF 在住期間は約 1 年になる。

現状では、幕府海軍関係者、幕臣等のリストを見ても、金子と若林に該当する人物が出て来ない。幕府海軍関連史料の散逸がその原因の一つとして考えられる。海外渡航の際に必要な印象の記録にも名前が出てこない。

当初は薩摩藩士伊東が金子への紹介状を持参してきたことと、金子の代わりに薩摩藩士が伊東の迎えに来たことから、金子薩摩藩士説を考えたが、この可能性は現地調査の結果、相当低下している。しかし、金子と若林が幕府海軍派遣の士官候補生であることを明確に証明する史料が発見されない限り、金子＝薩摩藩士説は留保しておいてもよいと考えている。

(2) 高橋 SF 上陸時の在留日本人

今回の調査で、幕末維新时期の SF 在住日本人の状況が明らかになってきた。主な史料となる地元の新聞記事には、日本人の名前が書かれていないケースが多いが、日米双方の史料を基に、高橋が SF に上陸した 1867 年 9 月 14 日を起点にまとめると以下のようになる。

《長期滞在》（半年以上）

- ① 出島松造 駿河国小鹿村名主の子弟 1861 年 1 月 28 日 SF 着 SF で商店経営
1868 年 5 月頃 SF 発
- ② 一条十次郎（後藤常） 仙台藩脱藩 SF 到着日不明 1868 年 12 月頃 SF 発
- ③ 大條清助 仙台藩脱藩 SF 到着日不明 慶應義塾
- ④ 久保村純介 福井藩脱藩 SF 到着日不明 慶應義塾
- ⑤ 田中鶴吉 幕臣子弟 オーストラリア経由 SF 到着日不明
- ⑥ 金子かんべい？ 幕府海軍 1867 年 5 月 7 日 SF 着 1868 年 6 月帰国？
- ⑦ 若林 幕府海軍 1867 年 5 月 7 日 SF 着 1868 年 6 月帰国？
- ⑧ 肥後十郎 薩摩藩脱藩 1867 年 6 月 14 日 SF 到着 慶應義塾
- ⑨ 竹内健蔵 薩摩藩脱藩 1867 年 6 月 14 日 SF 到着

- ⑩ 高橋是清 仙台藩 1867 年 9 月 14 日 SF 着 1868 年 12 月頃 SF 発
⑪ 鈴木知雄 仙台藩 1867 年 9 月 14 日 SF 着 1868 年 12 月頃 SF 発
⑫ 佐藤百太郎 佐倉藩 1867 年 9 月 14 日 SF 着 SF 市内の出島松造の店で勤務
-

- * ⑬ 塚原昌義 幕臣 1868 年 5 月 19 日 SF 着 1870 年 12 月頃 SF 発
* ⑭ 松本寿太夫 幕臣 1868 年 5 月 19 日 SF 着 米国で死去
* ⑮ 松本の息子 (Matsumote Taminosuki?) 幕臣子弟 1868 年 5 月 19 日 SF 着
* ⑬～⑮に関しては、*Daily Alta* 1868 年 5 月 19 日の下船リストに、Tomito and son, T.A. Kondo という日本人名が掲載されている。Tomito が松本の聴き間違えか変名、Kondo が塚原の変名と考えた。⑮の松本の息子に関しては、1870 年実施の米国国勢調査で、NY 市の住人として登録されている 13 歳の Matsumote Taminosuki の可能性がある。
- ⑯ ハイน์リッヒ・シュネル (Johann Heinrich Schnell=John H. Schnell=平松武兵、横浜在住プロイセン人) と日本人 3 家族 1869 年 5 月 SF 着 (ワカマツコロニー先発隊)
- ⑰ 鈴木貫一 彦根藩 1869 年 7 月 20 日 SF 着
⑱ 塚越酸素彦 小浜藩 (上州太田出身) 1870 年 7 月 13 日 SF
⑲ 多藝誠輔 (山脇正勝) 桑名藩 1870 年 7 月 13 日 SF 着
⑳ 栗原貞作 (高木) 桑名藩 1870 年 7 月 13 日 SF 着
㉑ 能勢栄 幕臣 1870 年 7 月 13 日 SF 着
㉒ 田村初太郎 幕臣 1870 年 7 月 13 日 SF 着
㉓ 斎藤金平 幕臣 1870 年 7 月 13 日 SF 着
㉔ 大路元雄 彦根藩 1870 年 7 月 13 日 SF 着
㉕ 石澤源四郎 会津藩 1869 か 1870 年 SF 着

以下は 1870 年に全米で実施された国勢調査に記載された SF 在住日本人である。

- Jap Omeyosen (ふじ) 小仕
- Jap Ofuchison (るい) 小仕
- 源助 小仕
- ふさたろう 小仕
- Keheri (si)

同じ国勢調査に、SF 在住ではないが、カリフォルニア州エルドラド郡 (Eldorado)

コロマ（Coloma）在住日本人が 22 人記録されている。ワカマツコロニーで働いていた日本人と思われる。

《短期滞在》（SF 上陸後、パナマ経由あるいは大陸横断鉄道で東部へ移動した者も含む。長期滞在と異なり、本稿の主な範囲ではないので、1868 年 SF 到着までを採り上げた。）

- ① 木藤市助 薩摩藩米国留学生第二陣 1866 年 9 月 SF 到着 モンソンへ移動
1867 年 7 月 22 日モンソンで自殺
- ② 小野友五郎（正使） 幕臣 1867 年 3 月 20 日 SF 到着 ワシントン DC へ移動
1867 年 7 月 5 日 SF 発
- ③ 松本寿太夫（副使） 幕臣 1867 年 3 月 20 日 SF 到着 ワシントン DC へ移動
1867 年 7 月 5 日 SF 発
- ④ 福澤諭吉（翻訳） 幕臣 1867 年 3 月 20 日 SF 到着 ワシントン DC へ移動
1867 年 7 月 5 日 SF 発
- ⑤ 津田仙弥（通訳） 幕臣 1867 年 3 月 20 日 SF 到着 ワシントン DC へ移動
1867 年 7 月 5 日 SF 発
- ⑥ 尺振八（通訳） 幕臣 1867 年 3 月 20 日 SF 到着 ワシントン DC へ移動 1867
年 7 月 5 日 SF 発
- ⑦ 神野信之丞（勘定吟味） 幕臣 1867 年 3 月 20 日 SF 到着 ワシントン DC へ移
動 1867 年 7 月 5 日 SF 発
- ⑧ 関某（小野従者） 1867 年 3 月 20 日 SF 到着 ワシントン DC へ移動 1867 年 7
月 5 日 SF 発
- ⑨ 石川某（小野従者） 1867 年 3 月 20 日 SF 到着 ワシントン DC へ移動 1867
年 7 月 5 日 SF 発
- ⑩ 小笠原賢蔵（海軍） 幕臣 1867 年 3 月 20 日 SF 到着 ワシントン DC へ移動
1867 年 8 月 5 日 ワシントン海軍工廠発
- ⑪ 岩田平作（海軍） 幕臣 1867 年 3 月 20 日 SF 到着 ワシントン DC へ移動
1867 年 8 月 5 日ワシントン海軍工廠発
- ⑫ 谷元道之 薩摩藩脱藩第二陣留学生 1867 年 6 月 14 日 SF 到着 モンソンへ移
動 慶應義塾
- ⑬ 野村一介 薩摩藩脱藩第二陣留学生 1867 年 6 月 14 日 SF 到着 モンソンへ移
動
- ⑭ 佐々木権六 福井藩 1867 年 6 月 14 日 SF 到着 東部へ移動 1867 年 12 月頃
SF 発

- ⑮ 柳本直太郎 福井藩 1867 年 6 月 14 日 SF 到着 通訳 東部へ移動 1867 年 12 月頃 SF 発 慶應義塾
- ⑯ 富田鉄之助 仙台藩 1867 年 9 月 14 日 SF 到着 ボストンへ移動
1868 年 9 月 2 日 SF 着—11 月 1 日 SF 発
1869 年 2 月 23 日再渡米 SF 着 ニューブランズウィックへ移動
- ⑰ 高木三郎 庄内藩 1867 年 9 月 14 日 SF 到着 ボストンへ移動
1868 年 9 月 2 日 SF 着—11 月 1 日 SF 発
1869 年 2 月 23 日再渡米 SF 着 ニューブランズウィックへ移動
- ⑱ 勝小鹿 幕臣子弟 1867 年 9 月 14 日 SF 到着 ボストンへ移動
- ⑲ 平賀義質 福岡藩 1867 年 9 月 14 日 SF 到着 ボストンへ移動
- ⑳ 井上良一 福岡藩 1867 年 9 月 14 日 SF 到着 ボストンへ移動
- ㉑ 本間英一郎 福岡藩 1867 年 9 月 14 日 SF 到着 ボストンへ移動
- ㉒ 青木善平 福岡藩 1867 年 9 月 14 日 SF 到着 ボストンへ移動
- ㉓ 船越慶次 福岡藩 1867 年 9 月 14 日 SF 到着 ボストンへ移動
- ㉔ 松下直美 福岡藩 1867 年 9 月 14 日 SF 到着 スイス留学
- ㉕ 伊東祐亨 薩摩藩 1867 年 9 月 14 日 SF 着 1867 年 10 月 14 日 SF 発 勝海舟 神戸海軍塾、江川太郎塾
- ㉖ 固葉英次郎（木葉十蔵） 薩摩藩 1867 年 9 月 14 日 SF 着 1867 年 10 月 14 日 SF 発 慶應義塾
- ㉗ 早竹虎吉一座 約 30 人 1867 年 9 月 14 日 SF 着
- ㉘ 城山静一 宇和島藩（士族ではない） 1868 年後半 SF 着 1868 年 12 月頃 SF 発（高橋，一条とともに）
- ㉙ 福井藩の医師 1868 年後半 SF 着 城山が通訳として同行？
* 福井藩の医師に関しては，勝海舟が息子の小鹿の留学費用の送金を依頼していた，福井藩の医師，本多貞次郎の可能性もある。

《不明》

- ① 花田新助 幕臣（江戸本所・幕府銭座勤務） 1866 年 SF 着？
- ② Mori Kakutzo 薩摩藩脱藩 1867 年 6 月 14 日 SF 着？
- ③ Mone Kango 薩摩藩脱藩 1867 年 6 月 14 日 SF 着？
- ④ Drozo 1867 年 6 月 14 日 SF 着 ブラウン小仕？
- ⑤ Gaugimatu 1867 年 6 月 14 日 SF 着 ブラウン小仕？

- ⑥ Saki 1867 年 6 月 14 日 SF 着 ブラウン小仕？
- ⑦ Ghोजje 1867 年 6 月 14 日 SF 着 ブラウン小仕？
- ⑧ 関口保兵衛 カリフォルニア州オークランドで家僕
- ⑨ 中尾某 芸州藩 1867 年 9 月 14 日 SF 着

本稿で扱ったのは、この中で長期滞在の⑥金子から⑨竹内までである。②一条から④久保村は、高橋の自伝に登場するということで簡単に触れた。⑬の塚原は金子と同じ幕臣ということもあり採り上げた。

彼らの特色として「脱藩」、「難民」のような経緯で SF にやってきた日本人が多いことが挙げられる。脱藩に至った経緯、渡米の金策などは不明であるが、当時の脱藩は、塚越酸素彦のように、向学心止みがたく、私費で渡米したという前向きな行動だったのではないだろうか。限られた予算だったので米国東部に移動せず、必要最低限の予算で行けた最短距離の「西洋」が SF だった。

久保村、大條、谷元、肥後、柳本は慶應義塾で、高橋と佐藤は横浜でヘボン夫人等に英語を習っていた。彼らにしてみれば、米国に行き、「本場」の英語だけでなく、米国の社会、制度、そして可能であれば祖国防衛目的の海軍学を修めたいという思いが強かったのだろう。英語をある程度学んだ人ならば洋行意識が高まるのは今も同じである。片道切符の旅費のみで思い立ち、ヴァンリードのような渡米エージェントの世話になり渡米を実現させた。

SF に着けば生活費はどうになる、というような話が、慶應義塾や横浜で英語を学んでいた日本人に流れていた可能性もある。

(3) シティカレッジと校長ヴィダー

金子と若林が学んでいたシティカレッジは、長老派教会の経営と言ってよく、この学校に 1867 年から 1870 年の間に、計 20 人の日本人が学んでいたことが分かった。日本人に人気があった理由の一つは、「アルファベットから大学教育まで」という教育内容の範囲の広さである。日本で英語をほとんど学んで来なかった留学生にとっても、ある程度学んできた留学生にとっても、好都合な学校ということになる。

渡辺正雄『お雇い米国人科学教師』（pp. 49-57）によると、当時の校長ヴィダーはニューヨーク州ロッテルダム（Rotterdam）出身のオランダ系米国人で、オランダ改革派教会ではなく長老派教会の牧師である。ニューヨーク州のユニオン・カレッジ（Union College）とペンシルヴェニア州ピッツバーグのウエスタン神学校（Western Theological Seminary）を出て、1858 年にカリフォルニア州の SF 近郊のナパ（Napa）の第一長老派教会（First Presbyterian Church）の牧師となった。オランダ系米国人として、オランダ改革

派教会との繋がりを調べる必要がある。

この 20 人という人数が事実であれば、幕末維新时期には、SF が、ニューブランズウィック、ボストン、モンソン等と並ぶ、日本人留学生のメッカだったことになる。今後はシティカレッジのスクール・カタログ (School Catalogue) 等の学生リストやカリキュラム、使用テキスト等を掲載した史料を継続的に収集し、20 人の日本人学生の名前を確定したい。

(4) 在 SF 日本名誉領事、チャールズ・ウォルコット・ブルックス (Charles Walcott Brooks) の存在

本稿では触れなかったが、幕末維新时期の SF は日本人が住むのに好都合な点があった。現地在住の米国人ブルックスが公使として日本人の面倒を見ていた。米国東部では、日本から来た多くの日本人留学生が、NY 市内のオランダ改革派教会のフェリスへの紹介状を携えてオフィスを訪ね、留学先の学校を紹介してもらったりしていた。

ブルックスは 1860 年の咸臨丸渡航以来、あくまでもボランティアで SF を訪れた日本人や、在留日本人に、必要とあれば協力を惜しまなかった。幕府は、横浜・SF 間の直行便就航に伴い、渡米日本人が増加するのを理由に、1867 年に米国日本公使ヴァン・ヴァルケンバーグ (Robert B. Van Valkenburgh) からブルックスの SF 領事任命を勧められた。鈴木祥『明治日本と海外渡航』(p. 22) によると、1867 年 10 月 25 日幕府から米国公使宛てに、領事任命の通知があった。内容は、「原則無給であるが幕府所要物品を購入した際代金の 5% を手数料として支給すること、領事業務により本業に支障が生じた際は別途手当を支給すること、すなわち名誉領事として待遇すること」(p. 22) が取り決められた。ブルックスは実際には「外国人に解雇された者や商業に失敗した者の救助」(p. 59) もしていた。

高橋の家事労働契約をめぐるても、富田と一条がブルックスを訪問し、ブルックスがヴァンリードを呼び出して、調停を行い、高橋の契約は破棄された。

このような日本人の「駆け込み寺」があったことは、渡米してきた日本人を SF に留めておく理由の一つとなっていただろう。

これは仮説に過ぎないが、既出の *Daily Alta* 1870 年 12 月 15 日に掲載された、Reconstructed Japanese — Progress of Japanese Students in America という大見出しの記事は、ブルックスが匿名で地元の新聞に寄稿したのではないだろうか。記事を読めば、著者が SF 在住日本人事情に詳しく、米国に来る日本人の好印象を読者に与えようという意図が感じられる。

ブルックス関連史料調査は、今後の SF 在住日本人研究の重要なテーマである。

(5) 中国人と比較された日本人の勤勉さと旺盛な好奇心 — SF ならではの日米交流

SF の新聞記事には、中国人と日本人を比べ、日本人の勤勉さを高く評価する記述が散見される。本稿で扱った、*Chicago Tribune* 1867 年 7 月 26 日に掲載された、同紙の SF 特派員 Altamonte 筆の SAN FRANCISCO — The Japanese and Chinese という記事がその一つである。

高橋の自伝でも、「日本人と支那人とは大変にちがう。家にいる保兵衛が、始めて貰った給料を何に使うかと見ていると、真先にヘボンの辞書を買って勉強する、支那人なら何を措いても金を貯めるが、それとは大変な相違だ」と知人の米国人女性が語っていたという⁽²²⁾。香港発横浜経由で SF に来る太平洋直行便には毎便数百人単位で中国人移民が上陸していたので、中国人と日本人が比較される機会も多かった。

当時の SF では、新聞記事等を見る限りでは、中国人移民に対しては一般的には好意的な記述は少ない印象を受ける。対照的に、幕末維新期の初期日本人長期滞在者が、勤勉さと知的好奇心を発揮して、SF の住民に好意的な印象を与えていたことが読み取れる。SF ならではの日米交流といえるのではないだろうか。

(6) 『高橋是清自伝』の史料としての問題点

本稿は、幕末維新期の SF 在住日本人に関する史料収集報告が主な目的であるが、基盤史料の『高橋是清自伝』の記述内容が史実と適合しているかどうか確認するミッションも担っている。以下に、今回の調査で判明した点を挙げる。

① 「鹿児島島の谷本」に関する記述（中公文庫 p. 44）

これまでの調査で、「谷本」という薩摩藩出身者は SF 在住日本人では確認されていない。谷本ではなく、1867 年 6 月に SF に上陸した薩摩藩士谷元道之と考えたが、現状では 1867 年 9 月 14 日に谷元が SF にいたことを証明するのは困難である。その日程でカリフリニアにいた可能性が高い、薩摩藩士肥後十郎と竹内健蔵が伊東の迎えに来たと考える。

また、伊東と高橋が、SF に上陸したその日（9 月 14 日）に、金子を探しにシティカレッジに徒歩で出向いたとある。当時のシティカレッジがあったユニオン・スクエアまで、埠頭からは途中登り坂になるが、歩いていける距離であり、記述通りにその周辺から港に停泊していたコロラド号が掲げていた日の丸の旗も見ることができただろう。高橋は、9 月 14 日はまだ暑気休暇中と書いているが、新年度はすでに始まっていて、この日は土曜日だったので金子は登校していなかった。

② 伊東、固葉、谷元の帰国に関する記述（同上）

高橋の自伝によると、「伊東、固葉の両君はサンフランシスコへ着いたは着いたが、すぐ同じ船で、前記の谷本も一緒に日本へ帰ってしまった」という（p. 44）。

SF の新聞に掲載された太平洋郵船社（Pacific Mail Steamship Company）の広告によると、9 月 14 日の後の SF 発横浜便は 10 月 14 日発のチャイナ（China）号だったので、これに乗って帰国したと考える。伊東と固葉はちょうど 1 か月間 SF にいたことになる。伊東や高橋が乗ってきたコロラド号は主に SF・パナマシティ間を就航する船だったので、9 月 14 日に横浜から SF に着いた後は、通常のパナマ便に戻ったのではないだろうか。この 1 か月間で伊東は恐らく金子に会えただろう。金子は海軍学の前に、シティカレッジで英語を修業している段階だったので、伊東は米国での海軍修業を諦めたのかもしれない。

また、谷本が肥後、竹内だとすると、この 2 人は 1867 年 12 月頃までは米国にいたことを示唆する新聞記事があるので、伊東と一緒に帰国していない。谷元の帰国は、薩摩藩側の史料によれば 1868 年 10 月である。伊東は固葉と二人で 10 月 14 日 SF 発のチャイナ号で帰国した。

7. 今後の課題と研究予定

今回の渡米調査はあくまでも SF 在住日本人研究の第一歩に過ぎない。今回入手できた幕府海軍の金子、若林に関する情報は、今後の幕末の幕府海軍研究にどのような影響を与えるか興味深い。是非、当該専門分野の研究者に調査、研究を進めてもらいたい。

自分の研究の次の段階としては、ブルックスが書いたのではないと思われる記事の、1867 年から 1870 年にかけて、シティカレッジ、あるいは SF で学んだ第二、第三の日本人グループに関する史料の調査、分析を進めたい。シティカレッジ、同校長ヴィダーとオランダ改革派教会に関する史料、ブルックス関係史料、そして、高橋渡米以前、以後の SF 在住日本人関連史料の情報収集も引き続き進めたい。また、横浜在住で、日本人の渡米の斡旋を行っていたユージン・ヴァンリード（Eugene M. Van Reed, 1835-1873）関連史料も発見されれば、渡米日本人に関する情報の宝庫であることは間違いない。

今回の研究は、SF 公共図書館の司書の方々を始め、インターネット上で貴重な情報を提供してくれている八木谷涼子氏、富山市在住の岡村俊之氏にお世話になった。以前ご指導いただいた日本英学史学会の先生方、現在執筆進行中のラトガース大学出版予定の著作の共同執筆者の方々にもご協力いただいた。同僚である拓殖大学外国語学部阿久津智教授には福井藩史料の読解でご協力いただいた。末尾となったが御礼の意を表したい。

《注》

- (1) これまでの塚越に関する研究成果は、以下の 2 本の論考で発表している。
塩崎智「小浜藩英学教師，塚越酸素彦（鈴彦，1842-1886）関連史料調査報告」（『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』48 巻，2022 年 10 月）pp. 116-135。
同上「小浜藩英学教師，塚越酸素彦（鈴彦）の化学，医学，英学修業—伝記『金蘭簿物語』の出生から渡米までの記述の検証」（『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』49 巻，2023 年 3 月）pp. 156-183。
- (2) 塚越丘二郎『金蘭簿物語』（塚越丘二郎，1929 年）p. 12。塚越が小浜藩に提出した渡米許可の願書に、「彼國（筆者注：米国）に知人数御座候」と書かれている。
- (3) これらの書物に掲載されている事例は大変興味深い，資料出典が明記されていない場合が多く，史実の検証が難しい。本稿が扱う時期の例として，1867 年に SF に着いた田中鶴吉（1855-1925，幕臣子弟）が挙げられる（今野，藤崎 pp. 53-54，桑井 p. 56）。田中に関する主な史料は、『時事新報』に 1886 年 1 月 15 日から 2 月 12 日まで，18 回に分けて連載された，「東洋の小ロビンソンクルーソー」という記事である。田中は米国から帰国後，製塩事業を行うために小笠原島にいたことがあった。この時に寄港した海軍大尉が田中の話を聞いて感銘を受け，聞き取った話を『時事新報』の記者が記事化したものである。内容は詳細に渡っている。田中に関する原史料にあたったものとしては，田村栄太郎『日本の産業指導者』（1944 年）があるが，製塩業に関する記述が大半を占めている。いずれ米国側史料による田中関連調査を進めたい。
- (4) 海外移住 150 周年研究プロジェクト 編『遥かなる「ワカマツ・コロニー」：トランスパシフィックな移動と記憶の形成』（彩流社，2019 年）。
- (5) 樋口雄彦「塚原昌義と武昌昌次：物産学を学びアメリカへ亡命した旗本」（『洋学：洋学史学会研究年報』22 号，2014 年）pp. 79-90。
会津藩から渡米した石澤源四郎の懐旧談の聴き取りに関しては，「明治二三年頃米国桑港本邦人の有様」（『史談会速記録』298 巻，1917 年，復刻合本 39，原書房，1975 年）参照。
- (6) 現状では，（4）で挙げた，海外移住 150 周年研究プロジェクト 編『遥かなる「ワカマツ・コロニー」：トランスパシフィックな移動と記憶の形成』に，幕末維新时期の SF を始めとするカリフォルニア州在住日本人に関する多くの貴重な情報が掲載されている。
- (7) 上塚司記『高橋是清自伝』（千倉書房，1936 年）。「序」と「手記者の言葉」によると，高橋は子孫に残すために，出版の数年前から，日記，手帳，往復文書などの資料を整理してきた。この中で資料として使えそうなものを，手記者の上塚司に渡した。
上塚はその資料を分類整理し，内容について高橋に質問し，高橋が答えた内容を筆記，清書し高橋がそれを補正するという形で自伝執筆の作業は進められた。もともと東京・大阪両朝日新聞社から発表されたものを，上塚が内容をさらに整備，訂正し，全一冊として自伝にまとめられた。広範な読者向けに面白く，読みやすく書かれている。本稿では便宜上，1992 年 16 版の中公新書版も使用した。
- (8) 一条に関しては，高橋とともに渡米した仙台藩士富田鉄之助が，渡米後同藩大童信太夫に宛てた手紙に，仙台藩を脱藩して SF で学んでいた一条十次郎（後藤常）と大條清助の近況報告を書いている（高橋秀悦『海舟日記に見る幕末維新のアメリカ留学』p. 18）。この史料は未見である。一条は高橋とともに，1868 年 12 月に帰国した。大條は高橋の自伝には登場しないが，慶應二年三月二十六日（1866 年 5 月 10 日）に慶應義塾に入社している。
窪村に関しては，『福井藩士履歴 7 子弟等』に久保村純介として記録が残されている。明治三年で 32 歳とあるので，SF 滞在は 20 代後半だろうか。元治元年六月二四日（1864 年 7 月 27 日）には慶應義塾に入社している。文久二年英学修業のため長崎に出立，慶應元年六月航

海術修業のため江戸へ出立、同年七月英学修業のため横浜出立の指示を受ける、というように英学と航海学を学んでいたようだ。

その後、年月日は不明だが「英吉利江罷越候節達捨二致出奔」と記録されている。これが脱藩渡米を意味すると思われる。

- (9) 固葉英次郎(木葉十蔵)は、元治元年十一月十九日(1864年12月17日)、薩摩藩士有馬新太郎、肥後隆之助とともに慶應義塾に入社している。
- (10) 谷元に関しては犬塚が次のように略歴を記している。本稿に関連がある部分を以下に引用する。

「慶應初年長崎に至りロシア軍艦で密航を企てるも失敗、上京して福沢諭吉の慶應義塾に入り英学を修得。慶應三年野村一介と米国に留学、明治元年九月帰国、同二年外務省出仕、外務権大丞を経て同三年再び米国留学、翌年帰朝し海軍大主計、海軍主計中監を歴任する。明治十四年官を退き東京馬車鉄道株式会社を創設社長となる。」(犬塚孝明「仁礼景範航米日記(その二)」(『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報』14号, 1985年) p. 33。)

- (11) ブラウンがJ. M. フェリスに宛てた、1868年1月28日付けの手紙には「イースト・ウィンザー(East Windsor)に残しておいた日本人も、そこ(筆者注:ハリスが主催する「新生社」)へ出かけて行ったのです。わたしは、わたしのつれてきた薩摩の家臣から、その旨、手紙を受け取りました。」(『S. R. ブラウン書簡集』p. 233)と書かれている。原文の英文を参照していないが、ブラウンに同行して渡米した谷元や野村は、ブラウンの出身地である、コネチカット州に一時期滞在していたとも読める。
- (12) 肥後は、慶應二年四月四日(1866年5月18日)に慶應義塾に入社している。
- (13) 八木谷涼子氏から、この記事の初出は、12月7日の*NY Times* ではないかとの指摘があった。Prince ZATSUMA, through his agent, KANIMI-NAME at Nagasaki, Japan, hereby warns という記述が入っている。
- (14) 1860年の咸臨丸到着以来、SF在住のチャールズ・ウォルコット・ブルックス(Charles Walcott Brooks, 1833-1885)というボランティアの「自称」領事官が在住日本人の面倒を見ていたが、この宴会には招待されていなかったようである。ブルックスが日本代表として金子と若林を推したのだろうか。
- (15) *Daily Alta* 1867年10月3日の紙面に、高橋と同じ船でSFに到着した勝小鹿のことが書かれている。ここで小鹿の父の海舟は、Prince of the Province of Ava と書かれている。安房守の守を prince と訳したのだろう。幕府の官位の制度が米国人にはよく分かっていなかった。1867年というまだ日本人渡航が限られていた時点であれば、上級幕臣を prince と表記する可能性は否定できない。
- (16) A. M. ローレンス号に関する英文記事は、八木谷涼子氏から提供していただいた。
A. M. ローレンス号は606トンの米国船籍の船で、太平洋郵船のコロラド号の4009トンと比べると、かなり小さな船だった。SFに向けての横浜出航日は1867年4月5日である。
- (17) 藤井哲博『長崎海軍伝習所』に掲載されているリストで金子と若林の名前は確認できなかった。長崎海軍伝習所第一期・幕府伝習生、同第二期・幕府伝習生、同第三期・幕府伝習生には見当たらない。諸藩の伝習生のリストを見ると、福岡藩に金子才吉の名前がある。若林は見当たらない。藤井が記しているように、これらのリストには遺漏がある。倉沢剛『幕末教育史の研究 II』, 手塚晃, 国立教育会館編『幕末・明治海外渡航者総覧』, 石附実『近代日本の海外留学史』等の基本的文献にも、幕末海軍留学生の金子、若林の名前は出て来ない。上白石実『十九世紀日本の対外関係―開国という幻想の克服』(pp. 108-121)や、海外移住150周年研究プロジェクト編『遙かなる「ワカマツ・コロニー」』(史・資料 pp. 69-117)を参照したが、印章等の日本出国の記録にも、金子と若林の名前は無い。幕末の幕臣米国留学生に関す

る記述は管見では皆無である。

- (18) シティカレッジについては、下記の記述を参照。現在、SF 市内には、City College of San Francisco があるが、これは創立が 1935 年であり、本稿で扱うシティカレッジとは異なる。

以下は、William Warren Ferrier, *Ninety Years of Education in California 1846-1936*, Sather Gate Book Shop, Berkeley California, 1937 の関連部分の拙訳（抄訳）である。アルファベットからでも学べるという点が、英語を学んでこなかった日本人には魅力だったのではないだろうか。

シティカレッジは長老派教会によって 1859 年 11 月 1 日に設立された。最初は生徒が 4 人だったが、クリスマス休暇の頃には 11 人、1860 年 12 月までに 55 人に増えた。

Ordinary English（米国の国語としての英語）以外に、ギリシャ語を学ぶ者が 3 人、ラテン語を学ぶ者が 10 人いた。設立当初は、Dr. Burrowes' School と呼ばれていたが、Dr. Burrowes' High School と呼ばれるようになり、1861 年には City College となり、現在の Union Square の広場の東南の角に 1 万ドルをかけて校舎が建てられた。牧師の Dr. W. A. Scott がその中心となった。

Dr. W. A. Scott が 1865 年に SF を去った後は、教育の中心的存在だった Dr. Burrowes が中心となったが、彼が引退し東部に去った後は、The Rev. P. V. Veeder がその後を継いだ。

Veeder は 1871 年に日本に去ったが、在職中に高等教育入学準備（Preparatory）、英語と古典語（English and Classical departments）、小学校（Primary School）を作った。Veeder は次のように語った。「カリキュラムは段階的に整えられていて、生徒がアルファベットから始めて、大学修了レベルまで段階を追って学べるようになっている。」

1871 年からは Dr. W. A. Alexander が校長となった。生徒は相変わらず地元住民の子弟が大半だった。学校の経済的な問題等もあり Alexander は 3 年で去った。

The Pacific (SF) 1868 年 4 月 30 日には、SF 市内の長老派のカルバリー教会（Calvary Church）の日曜学校の設立記念礼拝に、シティカレッジで学んでいる日本人が参加していたという記事がある。出席した日本人は 1 人だけなので、金子と若林のどちらかは分らない。原文は以下の通りである。

Anniversary of Calvary Sunday School

Among those attending these services is a Japanese who is now at school at the City College.

- (19) 小野に関しては、藤井哲博『咸臨丸航海長小野友五郎の生涯：幕末明治のテクノクラート』（中公新書、1985 年）を参照。

小野友五郎一行の在米中の行動は下記の通りである。日付は旧暦のものを陽暦に換算した。小野友五郎『小野友五郎亜國渡航日誌』（小野友五郎を伝えてゆく会、2019 年）を参照。

1867 年一月二十三日(2 月 27 日)コロラド号横浜出航、二月十五日(3 月 20 日)SF 着。

二月二十五日(3 月 30 日)SF 発、パナマを経て三月十八日(4 月 22 日)NY 入港。

三月二十二日(4 月 26 日)NY から首都ワシントンへ移動。

五月十日(6 月 12 日)NY 出航、六月二日(7 月 3 日)SF 着。

六月五日(7 月 5 日)SF 発、六月二十六日(7 月 27 日)横浜着。

一行の SF 滞在期間は、3 月 20 日から 30 日までの 10 日間と、7 月 3 日から 5 日までの 3 日

間の計 13 日間となる。このうち 4 日は SF 発着に費やされた。

この記事で取り上げられた 2 人は、小野一行のメンバーで幕府海軍から派遣されていた小笠原賢蔵と岩田平作の可能性も考えた。2 人は一行が幕府のために購入した戦艦ストーンウォール (Stonewall, 後の甲鉄) の日本への回航のため 7 月 5 日以降も米国に残っていた。

小笠原と岩田について書かれた記事が *Evening Star* (首都ワシントン) 1867 年 7 月 25 日に掲載されている。八木谷涼子氏に提供していただいた。大見出しは Agaswara Kenzo and Ewath Haisaku となっている。

The two young Japanese officers, Agasawara Kenzo and Ewath Haisaku, who arrived in this country in February last, will go out in her as passengers, and it is probable that when she is placed in possession of the Japanese, one or both of them will remain attached to her.

“These officers, after having visited various portions of the country, particularly the navy yards, arrived in this city several weeks since, and took up their quarters at Casparl’s, on Capitol Hill. They are quite intelligent young men, of about twenty-six years of age, are well versed in English, one particularly speaking the language quite fluently. They seem to have been very close observers, and will, on their return, take back much information in regard to this country. They dress usually in citizen’s clothes, but sometimes wear the uniform adopted for the Japanese navy, which is very similar to that of our navy, consisting of plain dark blue frock coats, around the sleeves of which are two gold bands, dark blue pantaloons, and vest cut high, dark blue cap without trimmings. They speak quite highly of the treatment they are received everywhere, and are quite at home at Casparl’s, where most of the officers of the Japan are stopping, and between them and our officers a warm friendship has sprung up.”

小野一行が横浜から SF に到着して以降の幕府海軍派遣の小笠原と岩田の足跡は明らかになっていない。この記事が書かれた時に 2 人は首都ワシントンにいたが、数週間前に来たと書かれている。それまでは米国のいくつかの海軍工廠を訪問していたようだ。2 人とも英語でコミュニケーションが取れていたが、特に片方がかなり流暢だったという。

藤井哲博『長崎海軍伝習所』によると、2 人は英語を話せなかったので、航海中 (米国からの帰途?) 通訳無しで苦勞しながら米海軍の現役士官の指導を受けたい。それでも、小笠原の方が若かった分、苦勞が少なかった旨が書かれている (pp. 154-155)。

ストーンウォールが首都ワシントン郊外のワシントン海軍工廠 (Washington Navy Yard) を出航したのは 1867 年 8 月 5 日のことで、小笠原と岩田は乗船し日本へと向かった。

9 月、11 月には 2 人はすでに米国を発っていたので、小笠原・岩田＝金子・若林の可能性は無い。

- (20) 塚原と松本に関しては、前出樋口の論文に加え、樋口雄彦『幕末維新期の洋学と幕臣』第一部第二章「物産学を学んだ旗本——武田昌次こと塚原昌義について——」に詳しい。

- (21) 『遙かなる「ワカマツ・コロニー」』によると、*SF Chronicle* 1869 年 6 月 17 日の紙面に、1868 年に英語とフランス語を話す日本人男性グループが SF にやってきた旨の記事が書かれている。彼らは政治亡命者の可能性がある。SF で仕事を得られなかったので、ヴァンリードの父親の助言でカリフォルニア州アラメダ群で農園を借り、初期投資を上回る利益を得たという。(p. 120)

塚原に関する論文で樋口もこの記事の内容に言及している。これによると、塚原と松本の横浜出航は 1868 年 4 月 28 日、SF 着 5 月 19 日であるので、5 月 23 日に金子・若林・塚原・松

本 4 人で農園を訪問した可能性はある。

塚原の SF での様子は、会津藩出身で SF で生活していた石澤源四郎の懐旧談「明治二三年頃米国桑港本邦人の有様」（pp. 536-549）にも語られているが、塚原のアラメダの農園の件には触れていない。塚原はシティカレッジのヴィダー校長と交流があった旨は書かれている。なお、前出、松村淳蔵の懐旧談「慶応年間薩摩人士洋航談」によると、松本は息子連れて渡米したが、松本は米国で病死した。（p. 600）

(22) 『高橋是清自伝』の中公文庫版では、p. 55 に書かれている。

参考文献

- 天野進吾，たたらなおき，村上敏『出島松造』（静岡新聞社，2021 年）。
- 石澤源四郎「明治二三年頃米国桑港本邦人の有様」（『史談会速記録』298 巻，1917 年，復刻合本 39，原書房，1975 年）pp. 536-548。
- 石附実『近代日本の海外留学史』（中公文庫，1992 年）。
- 伊藤久子「太平洋航路の第一船コロラド号の航海」（『開港のひろば』61 号，1998 年）p. 6。
- 犬塚孝明「仁礼景範航米日記（その一）」（鹿児島県立短期大学地域研究所 研究年報 13 号，1984 年）pp. 64-89。
- 同上「仁礼景範航米日記（その二）」（『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報』14 号，1985 年）pp. 1-36。
- 同上「第二次薩摩藩米国留学生覚え書——日米文化交流史の一齣」（『日本歴史』453 号，1986 年）pp. 34-51。
- 同上『明治維新対外関係史研究』（吉川弘文館，1987 年）。
- 今井庄次『お雇い外国人②外交』（鹿島出版会，1975 年）。
- 小笠原長生『元帥伊東祐亨』（南方出版社，1942 年）。
- 小野友五郎『小野友五郎亜国渡航日誌』（小野友五郎を伝えてゆく会，2019 年）。
- 海外移住 150 周年研究プロジェクト 編『遥かなる「ワカマツ・コロニー」：トランスパシフィックな移動と記憶の形成』（彩流社，2019 年）。
- 勝海舟『海軍歴史』（原書房，1967 年）。
- 上白石実『十九世紀日本の対外関係——開国という幻想の克服』（吉川弘文館，2021 年）。
- 上塚司記『高橋是清自伝』（千倉書房，1936 年）（中公新書，1976 年）。
- 神谷大介『幕末の海軍 明治維新への航跡』（吉川弘文館，2018 年）。
- 菅美弥「55 名のジャパニーズ——1870 年米国人口センサス調査票（population schedule への接近）——」（『東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅱ』60 号，2009 年）pp. 137-151。
- 桑井輝子『外国人をめぐる社会史 近代アメリカと日本移民』（雄山閣，1995 年）。
- 倉沢剛『幕末教育史の研究Ⅱ』（吉川弘文館，1984 年）。
- 小西四郎監修『江戸幕臣人名事典 第二巻』（新人物往来社，1991 年）。
- 今野敏彦，藤崎康夫 編著『移民史 3（アメリカ・カナダ編）』（新泉社，1986 年）。
- 塩崎智「小浜藩英学教師，塚越酸素彦（鈴彦，1842-1886）関連史料調査報告」（『拓殖大学論集。人文・自然・人間科学研究』48 巻，2022 年 10 月）pp. 116-135。
- 同上「小浜藩英学教師，塚越酸素彦（鈴彦）の化学，医学，英学修業——伝記『金蘭簿物語』の出生から渡米までの記述の検証」（『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』49 巻，2023 年 3 月）pp. 156-183。
- 鈴木祥『明治日本と海外渡航』（日本評論社，2022 年）。
- 高崎宗司『津田仙評伝』（草風館，2008 年）。
- 高谷道男編訳『S. R. ブラウン書簡集』（日本基督教団出版局，1980 年）。

- 高橋秀悦『海舟日記に見る幕末維新のアメリカ留学』（日本評論社，2018年）。
- 田村栄太郎『日本の産業指導者』（国民図書刊行会，1944年）。
- 手塚晃，国立教育会館編『幕末・明治海外渡航者総覧』（柏書房，1992年）。
- 土居晴夫「神戸海軍操練所史考」『軍事史学』（4巻1号，1968年）pp. 67-85。
- 濱屋雅軌『太平洋郵船と国際交流』（開成出版，2009年）。
- ハワイ日本人移民史刊行委員会編『ハワイ日本人移民史』（布哇日系人連合協会，1964年）。
- 樋口雄彦『箱館戦争と榎本武揚』（吉川弘文館，2012年）。
- 同上「塚原昌義と武田昌次：物産学を学びアメリカへ亡命した旗本」（『洋学：洋学史学会研究年報』22号，2014年）pp. 79-90。
- 同上『幕末維新期の洋学と幕臣』（岩田書店，2019年）。
- 福井県文書館『福井県文書館資料叢書 福井藩士履歴7子弟等』（福井県文書館，2019年）。
- 福澤研究センター編『慶應義塾入社帳』（慶應義塾，1986年）。
- 藤井哲博『咸臨丸航海長小野友五郎の生涯：幕末明治のテクノクラート』（中公新書，1985年）。
- 同上『長崎海軍伝習所』（中公新書，1991年）。
- 藤村是清「太平洋郵船外輪船中国人ステアリッジ船客の統計的再検討（1867-187年）」（『神奈川大学アジア・レビュー』2号，2015年）pp. 56-68。
- 『米国日系人百年史：在米日系人発展人士録』（新日米新聞社年，1961年）。
- 松浦章編著『北太平洋航路案内のアーカイヴズ——船舶データベースの一端』（遊文舎，2015年）。
- 松浦章『汽船の時代と航路案内』（清文堂，2017年）。
- 松永秀夫「田中鶴吉：東洋の小ロビンソン（1855-1925）」（『太平洋学会学会誌』28号，1985年）pp. 8-9。
- 松村淳蔵「慶応年間薩摩人士洋航談」（『史談会速記録』167巻，1906年，復刻合本24，原書房，1973年）pp. 591-603。
- 森孝晴「長澤鼎，アメリカに生きる——ニューヨーク州からカリフォルニアへ」『国際文化学部論集』（18巻3号，2017年）pp. 257-270。
- 結城大佑「福澤諭吉をめぐる人々 田中鶴吉」『三田評論 ONLINE 2021/06/28』<https://www.mita-hyoron.keio.ac.jp/around-yukichi-fukuzawa/202106-1.html>（2024年2月23日最終閲覧）
- 渡辺正雄『お雇い米国人科学教師』（講談社，1976年）。
- William Warren Ferrier, *Ninety Years of Education in California 1846-1936*, Sather Gate Book Shop, Berkeley California, 1937.

（原稿受付 2023年10月26日）